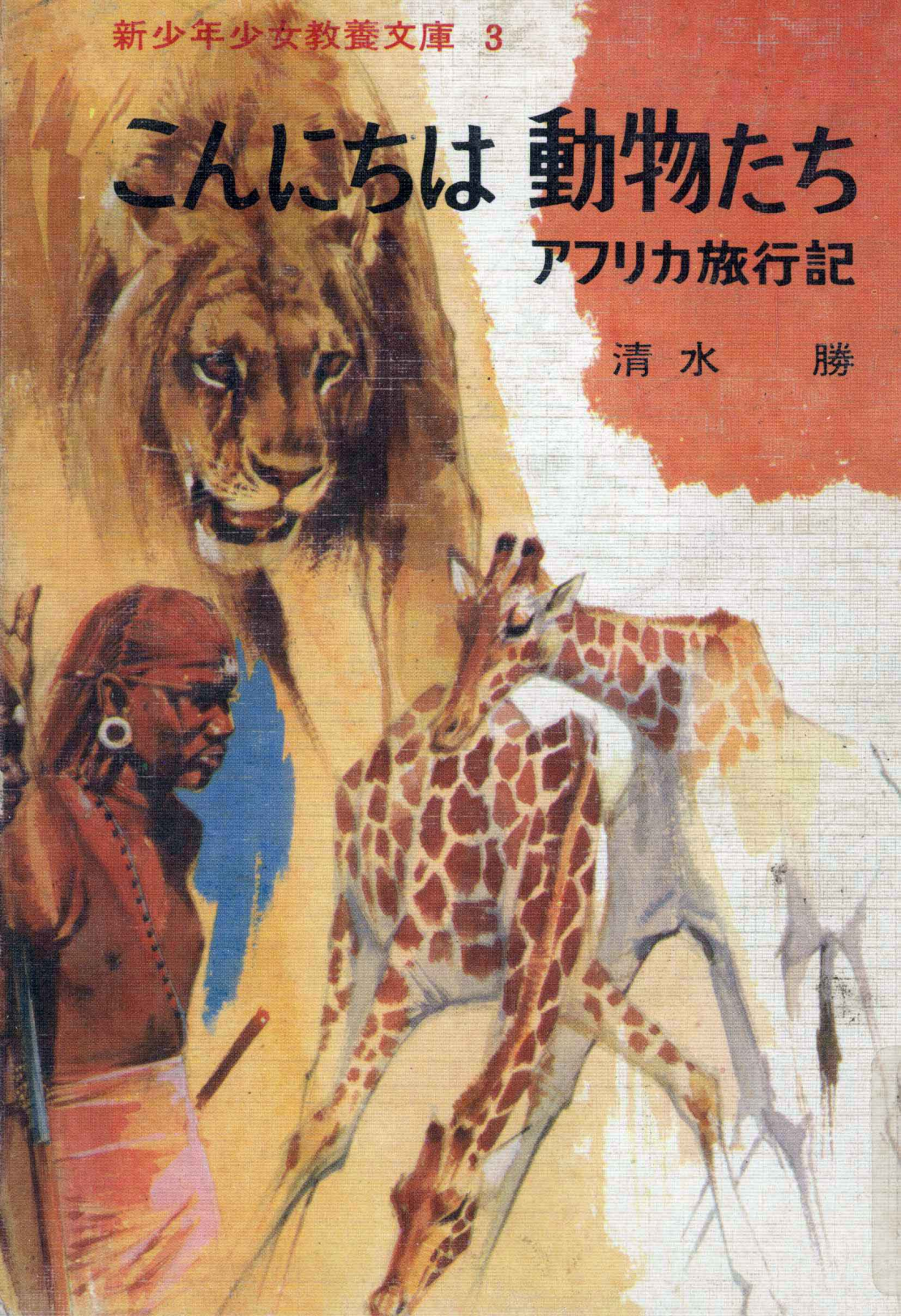
新少年少女教養文庫 3

こんにちは 動物たち

アフリカ旅行記

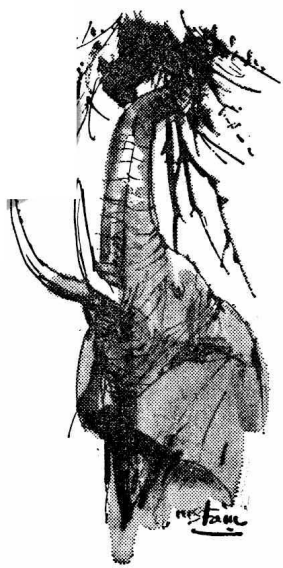
清水 勝



アフリカ旅行記

こんにちは動物たち

（新少年少女教養文庫　3）



清水　勝　著
清水　勝　装幀
さし絵

牧書店発行

清水（しみず）　勝（まさる）
913
アフリカ旅行記　こんにちは動物たち
〔新少年少女教養文庫　3〕
牧　書　店　1968年(昭43)
172P　22cm　小学4・5年〜中学
内容：動物画家の手によるアフリカ旅行記。野性のめずらしい動物たちの姿が，さし絵とともに浮きぼりにされ，子どもからおとなまで楽しめる旅行記。

■アフリカ旅行記　こんにちは動物たち
新少年少女教養文庫　3
定価　580円
1968年7月10日　第2版印刷
1968年7月18日　第2版発行
著　者　清水　勝
発行者　東京都新宿区揚場町1
牧　義雄
編集者　和田治子・原沢征雄
印刷者　東京都千代田区神田神保町3—23
塚田　重
発行所　東京都新宿区揚場町1
株式会社　牧書店
電話(269)2081〜4
振替　東京196483　郵便番号162
印刷・塚田印刷KK
製本・榎本製本所
〔落丁・乱丁の本はおとりかえいたします〕
1967年8月22日　初版発行

はじめに

子どものころから「動物の絵を描く」ことのすきだったわたしにとって、アフリカは、やはりあこがれの国であった。

わたしなどには、いろいろな意味で、とても行けないと思っていただけに、アフリカに行った感激は大きかった。

アフリカから帰ったわたしは、

「動物を描くあなたにとって、いろいろ、参考になることも多かったでしょう。」

と、あう人からいわれたものだ。

たしかに、野性の動物たちを、この目でみたことはプラスであったが、それよりもわたしは、もっともっと大きな収獲を得てきたように思う。

何を見ても感動をもてないということは、人間としてさびしいことである。まして、わたしなど、感動なしに絵を描くことはできない。

アフリカへ行っても、ゾウやライオンが、ただ草原をかけまわっていたというだけでは、アフリカまで何のために行ったのかわからない。たいせつなことは、そこで自分自身の心に感激をよび起こすことである。だから感動は、けっして人から与えられるものではなく、自分で求めるものだと思う。

そこではじめて、情熱と誇りをもって、心豊かに事にあたれるのではないだろうか。

だからわたしの場合、けっしてアフリカへライオンを見に行ったのでもなければ、ゾウを描きに行ったわけでもない。

ただ、これからのわたしの仕事が、いままでよりいっそうの感動をもってできたとしたら、これ以上の大きな収獲はないのである。

わざわざアフリカまで行かなくとも、人にわすれられたような目のまわりのものにも、感動を求めることができる。

これは、けっして絵を描く人たちだけではなく、まして前途ある若い人たちにとっても、たいせつなことだと思う。自分の選んだ仕事に、愛情と誇りをもってあたれるという意味において……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この本によって、わたしが、アフリカのどこに、その感動を見出したかということがわかっていただけたらうれしいと思っているし、また、愛すべき動物たちに、いっそうの関心と理解を深めていただけたとしたら幸いである。

おわりに、この本を出版する機会を与えてくださった児童文学者の、たかしよいち先生、ならびに牧書店社長はじめ、みなさまのお力添えを、深く感謝するしだいです。

一九六七年七月

清水　勝

アフリカ旅行記　こんにちは動物たち　もくじ

はじめに

出発まで……一

アンボセリへ……八

アンボセリの動物たち……一六

キャンプの夜……二七

ナマンガのマサイたち……三一

国境を越えて……四〇

モメラ・ゲーム・ロッジの人たち……四五

ゴロンゴロ・クレータへ……五五

水牛に出会う……六二
クレータに野獣を追う……六七
巨象天国……七七
ナイロビの町……八五
炎熱のマーチソン・ホールズへ……九〇
アルバート湖畔の動物たち……一〇六
ビクトリヤ・ナイルをさかのぼる……一一四
月の山、ルゥエン・ゾリ……一二三
赤道直下に立つ……一三二
月光の道をかける……一四六
さよならアフリカ……一五三

出発まで

「夢にまで見た」ということばがあるが、わたしがアフリカへ行くなんていうことは、いままで考えてもみなかったことである。もちろん、夢にも見たおぼえはない。子どものころ、動物小説や冒険物語などで、アフリカは、ただあこがれの国としての、まぼろしのような世界にすぎなかった。まして、いたって臆病者で、しかも健康にもまったく自信のもてなかったわたしが……である。

「動物画家と自分で名のるからには、一度ぐらいアフリカへ行け。」

わたしに会うたびに、知人の藤田博士は、こういった。

博士は外国航路の船医で、年はもう七十をすぎた高齢ながら、いままでに何回となくアフリカにいっている。船が横浜に着くたびに、わたしの家に立ち寄って、おもしろいアフリカの話を聞かせてくれ、「アフリカへ行け。」とけしかけるのである。

アフリカといっても、あの有名なアフリカ探検家のリビングストンやスタンレー時代のアフリカでないことは、わたしだってよく知っている。しかし、そうかんたんに「じゃあ、それでは。」というわけにはいかない。わたしは、「いいでしょうね。」とか、「そのうちに。」とかいって、てきとうにことばをにごしていた。

ある日とつぜん、ほんとうに何のまえぶれもなく、ひとりのアラビア人が、わたしの家をたずねてきた。

「いったい、あなたはどなたですか。」

めんくらったわたしは、いっしょにきた中国人の通訳にそのわけをきいた。

「わたしの名は、アブドル・ラシード、年は十九歳。藤田先生の紹介で、あなたに会いにきました。わたしの父、モハメッド・ラシードは、ケニアの主都ナイロビで事業を営んでいます。ドクターも父とは親しくしていて、わたしが日本の工場見学にくることについて、ドクターがよく世話をしてくれました。もしあなたが、アフリカへこられるなら歓迎しますよ。」

ラシード君の訪問の意味は、ざっとこんなようなことであった。

それにしても、てまわしのいい博士には、あらためて、おどろいたり感心したりしたが、内心「こりゃ、いよいよアフリカへいかなくちゃならないかな。」と、なんだか追いつめられたような気がしてきた。

この日のラシード君の話は、わたしのいままでのぼくぜんとしたアフリカ観を、いっぺんに身近なものにしてしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ラシード君が帰る時、求めに応じて、記念に尾瀬沼でスケッチした風景画をさしあげた。

ラシード君はたいへんよろこんで、別れぎわに「では、ケニアで会いましょう。もちろん、奥さんもごいっしょでしょうね。」とわたしの家内のほうをみた。もう、かってに、わたしがアフリカに行くことにきめているらしい。

ラシード君のすがたが見えなくなると、きゅうに、いま、ラシード君に贈った絵のことが思いだされた。あれは、わたしも気にいっていた絵である。

「わたしの絵がアフリカに行く。」

なんだかうれしいような、惜しいような気がしてきた。

「よし、ぼくもいこう。」

わたしの心ははじめて動いた。

「それに、わたしは動物画家なんだ！」

心がきまると、きゅうにいそがしくなった。わたしは、できるだけアフリカの資料集めにかかった。アフリカの「ア」がつく本なら、かたっぱしから買い集め、その関係方面へも気軽にかけまわった。博士の話では、ことばは英語でじゅうぶんだそうだ。といっても、わたしの英語は三十年ばかり前、旧制中学で習ったきりである。ことばの勉強もしなくてはならない……。

しかし、ことばの心配はあまり気にならなかった。最悪の場合、絵をかいて相手に伝えるつもりだ。絵は世界の共通語である。それにアフリカで講演するわけではない。わたしの相手はことばの知らない動物たちではないか。

そして、せっかくアフリカまで行くのだから、おおいに収獲を得たい。それには、わたしひとりでは、とてもむりだ。ラシード君は奥さんもいっしょにといっていたので、家内を助手がわりときめた。

ところがある日、よく家に出入りしている昆虫マニアで画家でもあるN君に、なにげなく、「アフリカへ行こうと思っているが、君、行かないか。」とじょうだんまじりにいうと「行きましょう。連れていってください。」と、いともかんたんに応じてきた。

かれは、ものを集めるのがすきで、ある日、ウシの頭骨がほしくなったので、屠殺場にいって、まだ皮も目玉もついたままのウシの頭をゆずりうけ、それを真夜中にわが家にもちかえり、そのままウシの頭をまくらもとに置いて寝たという豪傑である。

とにかく相手はアフリカ、こんな男がついてきてくれたら、女よりもどんなに心強いかわからない。それに、かれはカメラのことは、わたしよりもくわしい。しかもかれ自身、待望のアフリカの昆虫が集められるというわけである。

かれは、自分の飛行機代だけはなんとか工面するという。アフリカでの費用は、一人も二人もたいしたかわりはない。これでは家内をつれてゆくより、費用の点においてもおおいに助かる。

ついでに、帰りはあこがれのパリに立ち寄り北極回りで帰ってこよう。時期は、つぎのアフリカの乾期、十二月から翌年三月の間をねらってと、計画は、みるみるはかどった。

このようにして、とんだ弥次喜多アフリカ道中がはじまるわけである。その後、家にこられた藤田博士にこのことを伝えると、わが意を得たりと、まるで自分のことのように喜び、

「それじゃ、わしがいっしょだったら、助さん、格さん、水戸黄門漫遊記じゃ、ワッハッハッハ……。」

と、わたしの悲壮な気持ちも知らないで、豪快にわらいとばした。どこまでも人を食った先生である。

やがて出発の日が近づいた。一足先にアフリカに向かって出航した藤田博士は、インド洋航行中の船から電報をうってきた。

「アナタノ　アフリカユキ　イカニ」

「まだ先生は、わたしがアフリカへ行くことに、うたがいをもっているんだな。」そう思ったの

で、すぐ電報をうちかえした。

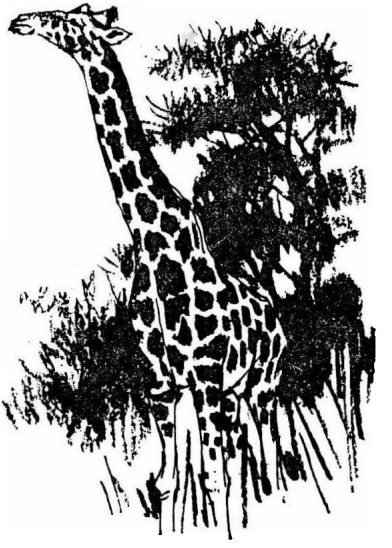
「ワレラ　二ガツ十五ヒ　ナイロビニツク　ラシードニヨロシク」

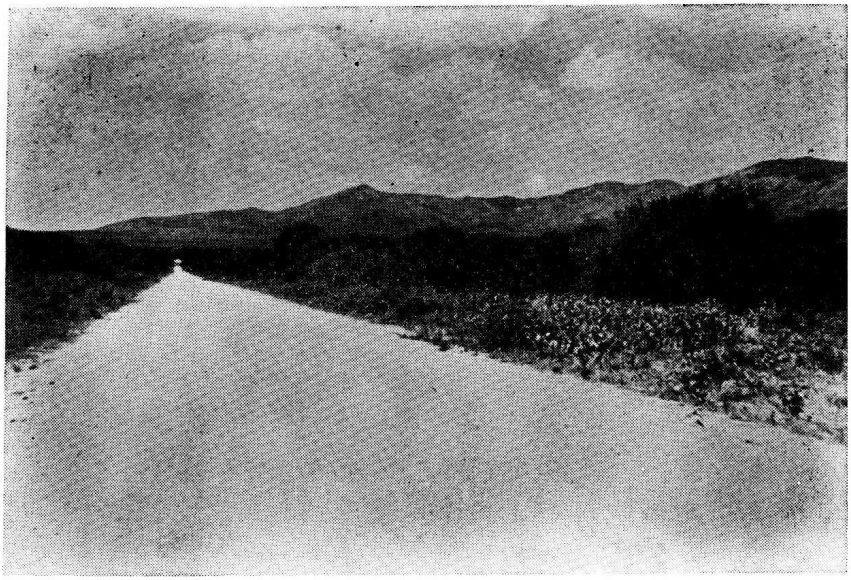
アンボセリへ

一九六六年二月十四日午前十一時、羽田空港からジェット機に乗りこんだわたしたち二人は、同月二十一日には、すでにパン・アフリカン・サハリ協会差しまわしのフォルクスワーゲンのボックス・ワゴンに乗って、アフリカの最高峰、キリマンジャロのふもと、レイク・アンボセリ（アンボセリ湖）の猛獣境を目ざしていた。

ケニアの主都ナイロビを出て、空港を横切ると、モンバサへの広い舗装道路に出る。とちゅう、この道を右に折れ、小さな町リバーを過ぎると、たちまちサバンナが一望のうちに展開する。

サバンナというのは、荒地ともいわれているが、広い広い草原で、わずかばかりの木が、あ





照りつける太陽の下を前へ前へ……。

ちこちにはえている地帯のことだ。

車は八人ぐらい乗れるが、乗っているのは運転手のチャガ族の黒人ジョンと、わたしとN君の三人だけ。荷物は広い車内の後ろに投げこまれてある。横になろうとどうしようと気楽なものだ。

時速百キロ。ところどころに生えているアカシアの木が、あとへあとへ、飛ぶように過ぎてゆく。

ケニヤの土は、聞いていたとおり、やはり赤かった。この赤いはてしない道が、ただ一本、強烈に照りつける太陽の下を、前へ前へ、緑のサバンナをつっきって、そのはては、大きく湧きあがる白雲のかなたにきえる。青く底のぬけたような空に、くっきりと浮かぶ雲は、目に痛いくらいだ。みわたすかぎりの緑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com